

よか ネット

YOKANET

NO. 12 1994. 11

(株)九州地域計画研究所



椎葉村民宿「焼畑」の山菜つくし焼魚（やまめ・ハナオクラ）、煮しめ（クロタケ・人参・里いも）、刺身（地鶏たたき・カラシナ）焼き豆腐、三杯酢（柚子・ペビーコーン・ぜんまい・筍・みょうが・ウド）、てんぷら（人参・茄子・唐芋・しそ・ピーマン・椎茸・やさいまめ・レーズン、モロヘイヤ、人参のかき揚げ・よもぎ）、こんにゃく、ソバの団子汁（本文8頁）

もくじ

〈NETWORK・ネットワーク〉

2. 地方シンクタンク協議会 第11回合同研修会「地域資源を生かした地域づくり」
4. 地域ゼミ ～佐賀県七山村・鳴神の庄の事業化経緯と取り組みについて～
6. 「よかネット」への御意見をいただきました
8. やぶにらみ九州論7 観光は、人柄・土地柄を通して感動を売る地場産業である
13. 「うらしま太郎」インストラクター養成研修

〈見・聞・食〉

14. 中国・渤海沿岸都市を見て回る ー東アジア研究会主催視察旅行ー
17. 「かんくう」へ行ってきました
18. 地味な遺産も立派な資源 ～市内散策“やまだぶらぶら”～

19. 食場日誌

〈近況〉

21. 椎葉村の焼畑 ー農耕文化の原風景を見るー
22. 所内勉強会 ～道路とは～

〈本・BOOKS〉

23. 「自由時間新時代」「現代ヨーロッパ農村休暇事情」 津端修一著

地方シンクタンク協議会 第11回合同研修会

「地域資源を生かした地域づくり」

10月6日、地方シンクタンク協議会の第11回合同研修会が佐賀市で行われ、全国から52の機関が集まった。今回の研修テーマは、「地域資源を生かした地域づくり」という、多様な地域づくりが行われている最近の動きに着目し、これまでのテーマよりも、身近に捉えられるテーマが掲げられた。基調講演と分科会は「自然資源」「産業技術遺産」「知的遺産」の3つの視点から行われた。その内容を簡単に紹介する。
 〈大いなる“いなか”づくり〉

まず「自然資源の視点」として、地元有明海の干潟を利用した「ガタリンピック」で有名な鹿島市の桑原市長の話があった。

- ・鹿島をアピールできる珍しいものは、と目にしたのが干潟。そこで運動会でもやろうか、と始まったのが「ガタリンピック」。今では外国からの参加もあり、国際交流にもなっている。
- ・「大いなるいなかづくり」を提唱しているが、決して田舎っぽくやろうというのではない。人間関係や治安の良さという地域資源を生かして地域づくりを進めたい。

〈若者・よそ者・のぼせ者〉

「産業技術の視点」では、有田焼の(ゆしん窯)の梶原社長から。

- ・伝統産業である有田焼が単に伝統産業のまちとして過去のものにならないようにしたかった。
- ・自己満足の製品でなく、どうしたら儲かるか、いい製品ができるかをみんなで考え、手描きの「青花(せいかに)」ブランドをつくった。



見学会で見た有明海の干潟

- ・地域の活性化には「若者・よそ者・のぼせ者」が必要だ。

〈知的遺産の語りつぎ〉

「知的遺産の視点」では久留米大学文学部の杉谷教授から。

- ・歴史的な先人の業績に何を学ぶかという視点から、まず先人が「どういうことをやったか」の整理が第一段階で、「どういう語り継ぎをするか」が次に求められる。これによって、現代に生かすことが大切である。
- ・それは、人間としての思想・行動に表れており、その哲学を学ぶことが大切である。

●第一分科会―「自然資源と地域づくり」

3部会のうち、最も参加者の多かった分科会である。このテーマ自体に、自然保護、地域活性化という相反する問題が含まれており、自然の捉え方、根本的な価値観の問題でもあるため、結論の出しにくいテーマでもあった。

席上では、温泉、昆虫、地形など、自然資源活用の事例紹介を中心に議論が行われた。得られた結論、課題をまとめると次のようになる。

〈まず地元の人のために〉

温泉活用の事例では、頑張ったら客が増えて宿泊料金を上げることができたのはよいが、住民が地元宿を容易に利用できない。まず地域の人のために資源を活かす必要がある。

〈教育材料としての自然資源活用〉

海で採れるカキやホタテなどの育成は、海の環境だけでなく、水源地である森林にも大きく左右される。このことは、動植物界の連鎖を子供達に教える教育材料となる。

〈当初は人材確保。波及効果は長いスパンで〉

過疎に悩む地域では、産業おこし、まちづくりをするにも、まずその担い手―地域に愛着をもち、そこにとどまろうとする若者が必要である。

多くの場合、自然資源の活用は、当面は誇りづくり、人づくりの資源として、その後産業おこしにつなげていくというビジョンで進めていくのがよいだろう。その波及効果は、5～10年でなく、20～30年の長いスパンで捉えなければ絶対に結果は見えてこない。

●第二分科会―「産業技術遺産と地域づくり」

この部会では、地域で育まれてきた産業、産業技術をいかに地域づくりに生かすかというテーマであった。遺産という言葉では、伝統的産業が焦点になりそうだが、もっと幅広くとらえておく必要がある。

〈技術継承のレベルの違い〉

産業、技術は、その残りがたのレベルが異なっている。そのまま残されているもの、何らかの形で新

しいものが加えられているもの、応用されて残っているもの、そして遺伝子がすでに途切れているものという4つに整理されるのではないか。これによって、地域への生かしかたが異なってくるだろう。

〈産業技術遺産をなぜ残すのか〉

この遺産をなぜ残すのかについては、ひとつは企業、産地の生き残り策として、二つ目は観光資源として、そして地域のアイデンティティ形成のツールとして、という3つに整理されるだろう。特に、企業博物館をなぜつくるのかという点で、企業数の増加が沈静化している近年、起業家創出の地域の土壌づくりとなるのではないか、そこへの期待が指摘された。あるいは、伝統産業においては、後継者問題が大きいと、職人の社会的な評価の向上、仕事のはげみとして、工房を開放するという動きもある。

〈技術は生まれ変わる〉

古くからある技術は、新しい技術に生まれ変わるために必要であり、新しい技術、産業を生み出すためには、地域の土壌づくりが必要である。その具体的な手法として、企業博物館、工芸館などによって、研究開発型のベンチャー企業、起業家を生み出す環境づくりで、新たな技術の展開も期待される。

●第三分科会―「知的遺産と地域づくり」

各地の知的遺産の生かし方の事例の紹介の後、知的遺産の継承の方策について議論が行われた。

〈知的遺産は形ではない〉

知的遺産は、歴史的遺産として先人の業績を明らかにすることから始まるが、思想として残るものであり、形として残るものではない。

そのため、この遺産の継承の方法として、教育とものづくりをとおして、運動へと展開することが必要である。そのとき重要なのが、遺産の継承システ

ムと同時に、知的活動の中核となる人である。

〈歴史的な遺産が頭に入った時から知的遺産に〉

文化財など歴史的な遺産は、これを学ぶことによって、頭に入った時から知的遺産として継承されるものであり、ややもすれば観光資源的な一過性のものになってしまう。これは、モノづくりにおけるハードとソフトとの関係にも共通しており、産業技術の発展過程においても、ハードとソフトは交互に表れ、ハードを理解し、頭で考えるソフトの時を経過してハードなものとして新しいモノが生まれてくる。これを担う人材を育成すること、すなわち地域づくりは、人づくりということにつながる。

研修会後の課外講座と見学会

合同研修会の後、課外講座として、青山公三氏（ニューヨーク行政研究所研究員）による「シンクタンクマンから見たアメリカと日本」という題で講演が行われ、アメリカにおけるシンクタンクの役割は重要であり、いろいろな計画を実行する際に、後悔しないために時間をかけてじっくり検討が行われ、そこでのシンクタンクは、議論をする手助けを行っていることなどの報告があった。

さらに翌日は、視察見学会が行われ、前日の疲れにも関わらず70名近い参加であった。佐賀の地域資源である「有田」の窯業文化に触れ、「吉野ヶ里」では弥生人の生活を垣間見、そして現代の自然資源である有明海の「干潟」を眺めるといふ、少々時間的な制約もあったが、今回の研修テーマにふさわしい見学会であった。

（山辺 真一、伊藤 聡、北村 茂樹）

地域ゼミ～「農産物直販所ブームの先端を行く」 佐賀県七山村・鳴神の庄の事業化 経緯と取り組みについて～

講師：七山村 産業課係長 岡本 光さん

私が佐賀県七山村を知ったのはごく最近のことで、新聞の記事や読者の投稿欄で、七山村の直販所では新鮮で安い野菜、その他、村の産物が買えること、それがとても好評であることを目にしました。実際に味わったのは、所員が持ち帰ったお土産としてでした。かにの炊き込みごはん、豆腐、よもぎもち、トマトらしい味とにおいのするトマト、どれもとてもおいしくて、私は、この七山村の直販所である「鳴神の庄」という名前をしっかりと記憶しました。

9月22日、地域ゼミに「鳴神の庄」の担当者である岡本さんをお招きしお話をうかがいましたので、報告します。

〈鳴神の庄のモットーは親切・信頼・信用〉

村の16の無料販売所から発展し、村と県の資金で昭和62年に設立された「鳴神の庄」は、順調に売上げを伸ばし、設立当時の4,300万円から平成5年には2億2,200万円になっている。当初、販売には職員が無報酬であたっていたが、現在は、7人の販売員が専任で働いている。1日の利用客は平均して200人ほどでその70%が福岡近郊からとのことだ。

「鳴神の庄」の特色をいくつかあげると

- ・営業は朝8:30から17:00まで（冬季は16:00まで）。休日には9時半頃には売り切れになる物も多く、大半が昼前に売り切れてしまう。
- ・「鳴神の庄」のモットーは「親切・信頼・信用」。このモットーのもとに、扱う品物は七山村でとれた

物、七山村の人が作った物だけに限っている。

そして、生鮮食品はとれた日、作った日しか販売せず、売れ残ったものは生産者が引き取るようになっていく。生産者は、氏名、出荷日、TELを商品に表記しすることが義務づけられている。

- ・ 値づけは生産者が行い、売上げの15%の手数料を除き、生産者個人の収入となる。

岡本さんは、この日何度もこのモットー「親切・信頼・信用」を口にされていた。安全（低農薬）で新鮮なものを安く提供すること、これを徹底して行い、守らない生産者には罰則もある。たとえば、その日のうちに残品を引き取らないと、何らかの改善策を提示しそれが認められるまで、その生産者は出荷停止というからかなり厳しい。また、消費者の嗜好をチェックし、これをもとに作付けを指導するなど品質保持に対する管理体制と努力は大変なものだった。

〈「鳴神の庄」の効果〉

次に岡本さんは「鳴神の庄」の効果として次の点をあげておられた。

- ・ 生産者個人の収入が増えた。
 - ・ 年間25万人の客が訪れるようになり、同業他者への波及効果もある。
 - ・ 就労の場が確保された。
 - ・ 老人や婦人に生きがいができ、村が明るくなる。
- 「とにかく村の人口の減少のことを話題にされるが、村人が住みやすい村であればいい、人は外から来てもらえばいいのだから。」岡本さんはこのように言われたが、村人がいきいきとして村が明るくなったこと、これが最も大きな効果だろう。

〈今後の「鳴神の庄」〉

七山村では役場の指導のもと、現在も様々な計画



新鮮な品の宝庫「鳴神の庄」

が進行中である。

- ・ 平成6年4月1日には「鳴神の庄」を法人化。
- ・ 平成4～6年にわたって村が8割を補助し、ファクシミリを各戸に300台設置、在庫がない場合の連絡や次週の出荷予定など、情報の双方向通信を確立。
- ・ 平成5年から、福岡都市圏での出張販売をそれまでの月1回から3回に増やす。
- ・ 「鳴神の庄」の商標権を申請中。

今後の課題として、商品の安定供給、更なる就労の場の確保などをあげておられたが、それぞれについて、すでにくいつかの案をあたためていらっやるとのことだった。

最近、いろいろな場所で直販所を見かけるようになり、そのなかで多くの固定客を得ることは難しいことだと思う。それには何より「鳴神の庄」のモットー「親切・信頼・信用」が大切になる。生産者の気持ちと買う側の気持ち、それを結び付ける岡本さんのような方の指導、管理があつて、この「鳴神の庄」の発展になったのだと思う。

（富重 慶子）

「よかネット」への
御意見をいただきました

〈皆様からいただいたご意見の一部を紹介します〉

(敬称 略)

①地域文化へ向けられた視点に感心しております。最近の政治言葉に「地方分権の推進」がありますが大きな誤りと思います。今中央がなすべきことは「地方主権の尊重」であり地方にあつては「地方主権の確立」です。中央から分けてもらう必要はないのです。

(東京 西谷隆義)

②NO11ありがとうございます。九州論6、今回も面白く読ませていただきました。知的集積のインフラストラクチュアは何かなどについて示唆豊かな小論でした。想像と推理をどんどん働かせて下さるよう期待申し上げます。

(東京 御船 哲)

③地方からの情報発信源としての、積極的かつ地道な活動に敬服します。異なる地域からの、時には当方にも共通の、時には全く異なる視点は貴重です。健闘をお祈りします。

(東京 長田 守)

④いつも小さいけれど(これがとっても大切なこと)すてきなニュースありがとうございます。

(東京 泉 眞也)

⑤円高のため、地域活性化を見る視点を考え直すべきかと思ったりしている。いつも意識しないまでも世界～日本～地域という構造、当たり前ではあるが円高とともにその構造のうちの「日本」が気にかかりました。「日本」は21世紀に向け、円高いたちごっこシステムと人口構造の高齢化という難題をかかえている。これに対応する内需主導型・高付加価値化・知識集約化・脱工業化ということが従来のように容

易に言えないように昨今感じられるようになった。いわゆる空洞化をめぐる論議をムード論にとどめず、きっちり検討すべきであろう。これもムード論に入ることだが21世紀に向けた日本の戦略として、また昔のようにその全体の力の再結集を図ることにより、空洞化を克服することが必要がでてきている気がする。その際一極集中を見直すという国土政策も新視点から見直して、従来の延長線上にない新たな国土構造論・地域振興論が求められる予感がある。そのヒントをこれからのよかネットから読みとりたいと思っている。

(東京 佐藤正憲)

⑥日本各地のまちづくりの様子から九州や日本各地のまちの息吹が伝わってくるようでまるで自分もその地に旅しているようです。今後も新鮮いきいき情報を伝えてください。

(滋賀 村田三郎)

⑦「全国の漁村から棕縄(シュロナワ)が忽然と消えた」(超大型戦艦を周りの丘に住む外国人居住者の目から隠すための、巨大な「なわのれん」を作るための材料集めだったのです)。一戦艦武蔵・吉村昭ーを思い出しました。長崎の400年の軌跡がそれを可能にしたのだということがわかりました。

よかネットNO11、謝々。

(京都 村上喜宣)

⑧はるか西方からの便りを心待ちにしています。私の住む奈良の都は、常に西方からの文化に触発され続けてきた歴史があります。

(奈良 竹本俊平)

⑨情報の東京一局発信が多い中、西よりの九州からの発信、興味深く読ませてもらっています。継続、発展されることを願っています。

(大阪 田村 務)

⑩文化は広めるものでも押しつけるものでもありません。関西には東京への対抗意識からか最近はやマスメディアを通じて文化の押し売りが感じられます。よかネットを読ませていただきますと文化は理解し合

うものであることをしみじみ感じます。

(大阪 中川要之助)

📖眼のつけどころにはいつも感心しています。NO11でも長崎の話から九州全体を考え、最後に‘東京にとっても好ましい日本’という位置づけでの地方というのは新鮮な感じを受けました。量子力学の創始者の一人、ハイゼンベルグは「部分と全体」の著書で自然という全体を理解するとき、典型的な部分における十分な考察こそが自然の新しい側面を見いだすキーポイントであることを指摘しています。私も常にそういう姿勢を保つべく心がけています。

(大阪 後藤誠一)

📖かつて福岡市、北九州市でも某官庁納めの社会システム構築に従事したこともあり、九州事情には心が動くところです。御社の益々の御発展をお祈り申し上げます。

(大阪 竹林和兵衛)

📖私はNIRAのフォーラムで報告させていただいたものの一人です。エクスカッションにも参加しましたが、よかネットNO11でそのあたりのことをきちんと報告していらっしゃるのに感心しました。

(兵庫 松村俊英)

📖‘よかネット学会誌よりタメになり’

タメになる情報いつもありがとうございます。夏期休暇で能登島町のガラス工芸、大平村の木喰と新旧のアートを観て、創作の音と汗に接してきました。思い考えを持続することが「分かる」作品に通ずるようです。「天才とは継続することなり」です。

(兵庫 高橋久栄)

📖金融(裏方)の世界にいと実動を錯覚しやすいものです。よかネットは私にとって大切な情報源であり、幅広い感覚を失わないための刺激剤でもあります。今後ともよろしく。

(兵庫 森井章二)

📖長崎には10数年住み、家内も長崎(小生が釣り上げられた?)ですので第二の故郷です。長崎論、興味深く拝読させていただきましたが、物をつくり出す生産力の否定論(ソフト化、サービス化というのは、京都のように他人の懐をあてにして生活することではないかと考えています)には頷けないものを感じましたが…。

(福岡 田中裕之)

📖よかネットのイメージ

①品の良い編集と仕上がり

②知的で奥が深い記事内容

③それでいて人情に訴えかける温かみがある

よかネットと思います。

(福岡 秀島一誠)

📖東アジア学会の視察では大変お世話になりました。近況欄ではみなさんの顔を思い浮かべつつ読ませていただきました。次回の詳報楽しみにしております。今後よろしく。

(福岡 木幡伸二)

📖「地方シンクタンクフォーラム」報告は興味ありそうですね。もっと詳しく知りたいもの、来年1月17日、文化人類学者クリフォード・ギアーツが福岡に来ます。2年前福岡アジア文化賞をとった人です。受け入れ準備中です。

(福岡 丸山孝一)

📖みなさんの元気な姿がよかネットから飛び出してくるようです。小生も元気です。“JIA ‘94福岡”ということで初めて九州で開催されます。実行委員として準備に大変です。10/11~12日北九州市、10/13~14日福岡市です。テーマは“地球をデザインする”=自然と人と建築その新しいパラダイムを求めて=です。暇の折には御参加下さい。

(福岡 阿南栄保)

📖長崎論、面白く拝読しました。長崎を北部九州の再開発の視野に入れていただけるよう、いつも希望しています。

(長崎 姫野順一)

やぶにらみ九州論7

観光は、人柄・土地柄を通して
感動を売る地場産業である

〈観光は横着な産業?〉

観光は最も横着な産業だと常々思っている。一般に商売というものは、セールスマンが一生懸命、客の方に売りに行くということが普通のように見えるが、観光だけは逆で、絶対に客が動かなければならない。観光は、①客を遠路はるばる来させて（自分では動かずに）、②地元の産品を売りつけ、③地元の労働力でサービスをし、④原則としてモノを渡さないことを前提しており、まとめると⑤100パーセント輸移入型地場産業である。ひと言でいうと「自分は横着にかまえて、客にあたふた忙しい目にあわせて、その上何もモノを渡さずに金をむしり取る」産業ということになる。

これは、観光という典型的な地場産業の面白いところであるが、一方では最もむつかしいところでもある。それは上記のうらがえしで、①客がわざわざ来る気になるような“もてなし”を準備していなければならないし、②客が満足するような特色のある地元のたべものなどがなければならないし、③心のゆき届いたサービスがなければならないし、④喜んで金をむしり取られた上でまた来ようと思ったり、知人に宣伝をする気になってもらわなければならない。宣伝隊を繰り出すことも必要かもしれないが、誇大宣伝で客を裏切ったら逆効果になる。

まず一番必要なのは、コストと品質の点で、他に負けない“もてなし”である。

〈地場産業でないのは観光ではない〉

輸移入型地場産業と述べたが、そうでないのは詐

欺行為である。最近では各地の観光地の土産品は、その土地とかかわりなく、大都市周辺で土産品工業が製造したものを売るのが一般的になっている。私をはじめは何度も騙されたが、今では必ず製造場所を書いたラベルを見るようにしている。つまり地場でつくられていない土産品は、一種の詐欺とみななければならない。このような土産品は地場産業ではなく、輸移入産業となってしまう。

観光産業の自給率を考えてみたいが、その前に他産業を見ると、九州で注目されている自動車（九州内の自給率：以下同）で39%程度、一般機械で37%などと、工業関係はそれほど高くない（「九州地域経済の産業連関分析」S60）。ところが、観光の場合は、九州の適当なデータがないので京都の観光調査をみると、宿泊・料飲・土産品関係で大体半分が従業者の件費（地域自給）で、残りの半分のうちの80～90%が市内仕入となっている。あわせると90～95%が地域内自給である。九州の普通の観光地がこれより低いということは考えられない。例外があるとすれば東京の大手チェーンのホテルとかテーマパークなどであろう。

いずれにしても観光の域内自給率は高い。仮に100億円の売り上げ（1万円消費する客が100万人来る）があれば、50億円の給与等が発生し、40～45億円の仕入れ（原材料が20～30億円、経費が20～30億円など）が発生し、この90～95億円が次の購買をうながす。

産業構造というものの、あるいは産業分類の概念自体を、もっと「地域エゴ」の立場で考えてみる必要がありはしないか。

日頃そんなことを考えながら、遠野と椎葉に行ってきた。そこで典型的な観光体験をしたのでそれを

報告したい。また最近、商品（観光サービスの）としての品質の良さと商売の成功はなかなか一致しないということについて考えている。世の中のトレンドの見方と商品開発についても、私がたくさんの失敗をしていることを思いおこしている。これについても報告したいと思う。

以下、遠野、椎葉、品質と営業、トレンドの見方と商売としての成立性などについて述べる。

〈遠野もひどくなりにはけりと思った〉

遠野へは一度行ってみたいと思っていた。それは柳田国男への一種の憧れみたいなものであり、私自身の子供の頃の田舎の“ものがたり”へのノスタルジアでもある。

ところが、最初にひどいものに引っかかってしまった。食いしん坊の私が、6月下旬の昼時たどり着いて、ガイド本でみた「〇〇茶屋」というところで“かねなり”という餅を食うことにしたのだが、これが失敗だった。今思い出しても腹が立つ。大体、威張った店名をつけるようなものに、ろくなものがあるはずがないのであるが、食い意地がはっているためにひっかかってしまった。

入ったときに「こりゃあ、まずい」という気はした。店の造りが、いわゆる“民芸調”というやつで、遠野とは関係のない普通名詞の、全国区の都会風にアレンジされた田舎調であった。壁も変であったが、店のテーブルに長椅子がついていて、それに緋毛氈がかけてあるのだが、それに厚手のビニールのカバーがかけてある。汚れるのがいやなら使わなければいい。木そのままの椅子の方が雰囲気もいい。汗をかいて歩いてきたので出るわけにもいかず、名物という餅とそばを食べたのだが、どちらもひどかった。そばの入れものは内側が朱塗りの破箆であった。大体、

田舎で、そばを朱塗りの入れものに入れたりはない。そばなんぞというものは代用食に過ぎない。それを朱塗りでというのは、まさに“普通名詞の民芸調”の押しつけであった。

我慢を重ねて一応食べ、タクシーを呼びたいので電話を借りたいと言ったところ、「うちの電話は公衆ではない、自家用である」と言ってことわられた。荷物もあったので一方的に屈伏してして再度頼んだところ、「私が呼んであげよう」と恩に着せ呼んでくれた。勘定を払ったが、消費税の他に50円也のタクシー呼び賃が入っていた。

「遠野もひどくなりにはけり」がなと思わざるをえなかった。

〈やっぱり遠野はよかった〉

ひどい機嫌になっていたが、遠野を見て廻るうち少しは良くなりつつあった。それが一挙に直ったのは「民宿・曲り家」へ着いてからである。着いたとき「今晚は“語り部”のおばさんに来てもらおうと思っているのですが、500円くらい負担していただけますか」と言われた。その時「こりゃあいい宿に来たぞ」と思った。

食事も感激だった。すべて土地のもので、てんぷ



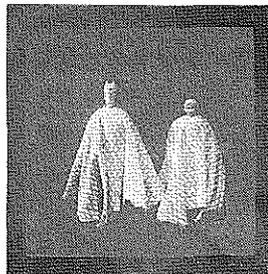
民宿「曲り家」、手前の棟に泊めていただいた。



囲炉裏をかこんで遠野の民話をきく
語り部は白幡ミヨシさん(84歳)

らなどは付近の野草ばかりである。食事の後の遠野の民話は、はじめはほとんど言葉がわからなかったが楽しく、おいおい理解できるようになった。柳田国男の「おしらさま」の話は遠野の方言で、ナマで聞けるなどとは思ってもしなかったことである。遠野に来て初めてできることであり、遠野では観光客のためにいろいろ施設がつくられていて、そこそこに良くできていたが、この民宿に勝るものはなかった。民話を4~5題聞いた後、おばあさんと記念写真を撮り、名刺をもらって帰ってきた。

観光というものについての私の考えを一言付け加えると、「観光は本来“ヤラセ”であるが、それは本物を媒介したものでなくてはならない」と思っている。「民宿・曲り家」では民宿の人の優しいヤラセ心によって、遠野に行かなければ感じることでできない気分を味わうことができた。一方「名物茶屋」では、人を小馬鹿にしたニセモノづくめのヤラセで、遠野とは縁もゆかりもないもので詐欺というべきものである。どこでも、まだ前者の例が少なく、後者の



とおの昔話村の
“おしらさま”

例が幅をきかしているのは残念である。

もうひとつ蛇足。マスコミで消費税が益税になっているという批判があるが、少なくとも、関西から九州にかけては一般の飲食店や小売店で、消費税として取る店は少ないように思う。東北へ行って見て、消費税を払わなくてもよさそうな店でも消費税を取る店が多く、東京のガメツイ習慣が入ってきているのだと思った。これも少し寂しい状況である（「民家・曲り家」は違った）。

〈平家の落人村といわれる椎葉のひえつき節〉

9月下旬椎葉村へ出かけた。椎葉はどこからいっても遠いところで、そこへたどり着くまでの間に鶴富姫と那須大八郎の悲恋の物語りを何度も読むことができた。かいつまんで説明すると、平家の落人が逃れているという情報を得た鎌倉幕府の命で、那須与一の弟の大八郎が追討に向った。

行ってみると大変なところで、その上逃れていた平家一門は戦意を失っていた。大八郎は討つに忍びず、「平家残党は一人残らず討った。」という旨の使いを出し、自分はそこに3年余り残って農耕を教えたりした。そのうちに平家の末族と言われる鶴富姫と恋仲になったが、鎌倉よりの帰還命令によって鎌倉へ去った。ところが鶴富姫は女兒を儲け、その子に婿を迎えて那須姓を名乗らせた。……ということに



左：築300年と言われる鶴富屋敷
中：民宿「焼畑」



右：椎葉さんご夫妻に焼畑の説明を聞く



なっている。

ここまで書いてきて気がついたのだが、「ひえつき節」という歌は、今までは単なる稗を搦くときの歌だと思っていたが、これは鶴富姫と那須大八郎の悲恋物語のようだ。誰でも知っていることかもしれないが、「庭の山椒の木鳴る鈴かけて、鈴の鳴る時や出ておじやれ。鈴の鳴る時や何と云うて出ましょよ、駒に水くりゆと云うて出ましょ」と来ると正に恋の相聞歌である。

話がそれだが、椎葉村には300年前ぐらいに建築されたとみられる鶴富屋敷がある。重要文化財に指定されているし、那須姓や椎葉姓も多い。

〈焼畑は人と自然が一体となった“じねん”の農業〉

椎葉では役場の助役さんの紹介で、焼畑を見せていただくことになっていた。ややこしくて申し訳ないが、またここまで書いて来て「はたけ」という字がふたつあることにひっかかった。「畑」は山を焼いて開いたもので、「畠」は中国で水田に対するはたけを白田の二字で表しているものを、日本では一字にまとめたもの……と『漢語林』にある。椎葉は山ま

た山で、およそ水田はもちろん畠もなかったにちがいない。

中国に行って驚くことは、延々と続く畠であり、一方全く焼畑などでできそうにない禿山である。司馬遼太郎の本に、「中国は製鉄のために山林を伐り、全部燃料にしてしまつて禿山になったが、日本の山は適度な降雨量と気温のため“たたら製鉄”が続いたのだ」ということが何度も出て来る。ひょっとすると焼畑もそんな自然環境のところに適した農業であろう。

焼畑は椎葉秀行さんとクニ子さんという老夫妻（老という雰囲気はないが、70才ぐらいで孫18人、曾孫2人）が中心になって続けられていた。この焼畑の手順を示しておく。

- 夏ヤボ：前年の10月にヤボ伐り（灌木を伐る）
- 1年目：8月頃火入れをして山を焼き、翌日にはソバを蒔き、10月下旬にはソバの収穫
- 2年目：ヒエカアワを蒔き収穫
- 3年目、4年目：小豆や大豆などをつくる
- 4年目、5年目以降：15年間ぐらい山に返して、炭焼きの材などをとり、また焼畑との循環をする。



民宿「焼畑」の広間にある「椎葉秀行家の年中行事」。これも知恵のうけつぎシステムのひとつ

椎葉村は山また山で人口密度も低く、畠や水田は少なく、山と暮らしてゆくためにはこの焼畑がもっとも適した方法だったと思う。

私は「自然がやさしい」という言葉が最もきらいで、焼畑のように自然を伐り焼きはらうような酷いことをしながら活用し、「人間が自然と一体となって生きてゆく」という「きびしいつきあい方」が好きである。日本語には“じねん”と言う言葉があって、人間が大自然と一体となった状況をさしている。

地球上でこれだけ人間以外の対象を破壊しながらはびこって来た人間が、「自然を守れ」などといっても信用ができない。それに対して、自分の都合を含めて、“じねん”に生きてゆく知恵が焼畑にあらわれていた。

〈豊かな自然は残っても、それを生かす豊かな知恵は続くのだろうか〉

泊めていただいたのは椎葉秀行さんの民宿「焼畑」であった。このご夫妻は絶妙なふんい気で、秀行さんから焼畑の方法などをトットツと、それでいて淀みなく聞き、奥さんのクニ子さんからは、山菜の話

をとどまるところを知らず伺った。残念ながら当方の貧弱な頭には具体的な知恵は残っていない。もちろん、「すごく聞いたぞ」という満足感には十分に残っている。

知恵以上に満足感が残ったのは、多彩な山菜の味の方である。これは伝えようがないので、そのとき聞いた品々を書いて生唾を飲み込んでもらうより方法はない（生唾を飲みこむたしに、当誌の表紙に写真と山菜などの種類を書いた）。奥さんの山菜の知恵はすごいもので、すでに朝日新聞の地方版に400回連載されており（その切り抜きを見ながら聞いた）、いずれ出版されるということだった。

この山菜の話聞きながら「この知恵はどうなってしまうのだろう」という思いを禁じえなかった。「豊かな自然」よりも、豊かな自然から恵をいただく「豊かな知恵＝恵を知る」ことがなくなったらどうなるのだろう。

自然を守る運動は盛んであるが、何のために守るのだろうか。私たちの遺伝子には、エゴで功利的なものが圧倒的優勢にうけつがれているにちがいないと思っているが、こんな人間どもが、抽象的な自然保全運動をしても信用がならない。「落のとうのオヒタシはうまいから」とか、「野生のウドの皮のキンピラをたべたい」や「鯨のオサシミがたべたい」などと思っている人間が、根こそぎ自然を破壊することはないにちがいない。

椎葉村で、豊かな知恵がベースになっているような自然とのつきあい—じねんの姿勢—を学ぶことができたと思っている。この「知恵のうけつぎシステム」をどうすればつくり出せるのだろうか。

〈以下次号〉

（糸乗 貞喜）

中国・渤海沿岸都市を見て回る

—東アジア研究会主催視察旅行—

去る7月の下旬、「東アジア学会第4回大会」が初めて中国で開催されるのを機に、当学会及び渤海沿岸地域の主要都市（天津、東営、青島）及び北京への視察旅行に同行させていただき、市場開放政策導入後の中国の実態を見てきた。

- 1日目：福岡より大連經由北京へ
バスにて天津へ約100km
夜：簡単な宴会（中国側）
- 2日目：天津
9:00～17:00頃までシンポジウム
夜：宴会（中国側主催）
- 3日目：天津
午前中：天津経済技術開放区視察
昼：答礼宴（日本側主催）
午後：バスにて一路東営市へパトカーの先導にて約300km程移動 20:00頃着
夜：宴会
- 4日目：東営
一日中東営市内の油田開発、石油精選工場、ダム、黄河下流域などを見学（約300～400km）
夜：食事の後シンポジウム
（全員疲れていたため、本日は資料に目を通すという事になり、翌日午前中に延期）
- 5日目：東営
午前中：シンポジウム
昼：答礼宴
午後：バスにて一路青島市へ約400km移動、18:00頃着
夜：宴会
- 6日目：青島
午前中青島市内視察
- 7日目：北京市へ移動（昼頃着）
市内自由行動
- 8日目：北京及び万里の長城など観光
- 9日目：大連經由福岡へ帰る



東営市位置図

東アジア学会とは九州・山口の研究者を中心に組織されている学会であり、主に環黄海経済圏をめぐる問題を研究している学会であり、昨年までは韓国側と共同で大会を開いてきたが、今年初めて中国側研究者も加わった大会となったものである。

香港、広州は3年前に行ったことはあったものの比較的長い期間をかけての中国旅行は私にとっては初めてであり、中国の活気と日本に寄せる熱い期待みたいなものを感じる旅であった。

本稿では、視察期間中に感じた中国の暮らしぶりや経済状況などを日本との比較を絡めながら、私の随筆紀行としたい。

〈熱心な歓迎は日本へのラブコール〉

総勢20数名の視察団であったが、参加者の多くはオフィシャルな行事が続くことを知るよしもない旅立ちであった。

私などは「市場開放政策後の中国を見てみたい」といった好奇心のみの参加であったため、今回の中国側の歓迎ぶりには面食らった。

一都市二日間の行程にしては比較的ハードな旅であったのは表の大まかなスケジュールを見ていただければご理解いただけるものと思う。

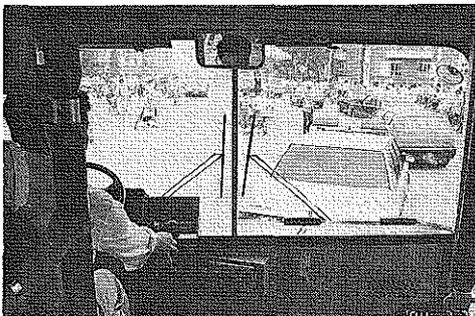
各都市での夜の歓迎会では、市長、共産党委員会広報宣伝部長、経済研究所主任、南開大学の先生方をはじめ多くの関係者が出席された。会のはじめには、中国、韓国、日本の各国代表者が挨拶されるなど、(各国の挨拶の度に通訳が2回必要であるため、通常の3倍の時間を要した)盛大なものであり、中国側の日本に対する期待の大きさが伺われた。このような宴会が4日続いたためか、食べつけない中華料理の数々のためか、あるいは多少の緊張のためか、視察団一行のほとんどの方がお腹を壊してしまい、私も3日目の夜には3回程トイレにかけ込む羽目になった。

胃袋の負担に比例して中国の熱い思いを感じる旅となった。

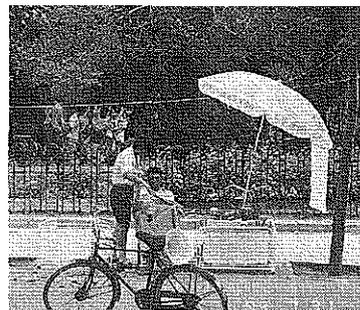
〈中国の税金制度はどうなっているのか〉

各視察先を見て回っていると、道路沿いや街角で果物やジュースなどを売っている露店商がやたら多いのに気がつく。中にはこんな所で商売して一日の売上げもたいしたものにならないのではないかと首を傾げたくなるような店も見られた。

日本では税金の徴収システムが完備しているので、どんな小さい露店商でも税金の取り損はないだろうと考えられるが、中国では果たして露店商の人



パトカーの先導にて東営市へ



道端の床屋さん

も全て税金を納めているとは考えられない。中国側の案内の人にその辺のことを聞くと、「たまに税金徴収のため係りの人が来るみたいですが、みんな逃げてしまうらしいですよ。」と話された。日本のインフラストラクチャーの整備は、税金徴収システムと日本人の税金納入義務に対するまじめさ(取られることの慣れ)の賜物と思うが、中国の場合、市場開放政策導入後に自由に商品の取引ができるようになる程、貧富の差が益々大きくなるのではないかと思われた。経済評論家の邱永漢氏は『日本では雇われ社長と新入社員との所得は7倍程度であり、生産体制は資本主義であるが、富の分配に関しては世界の中で最も社会主義である』と指摘しており、今後、中国では日本並みとはいかないまでも何らかの税金システム制度を導入しないと、日本と逆の構造になるのではないかと思われた。

〈本よりとりあえず金儲け〉

北京では久留米大学に留学の後、弊社のネットワーク事務所であるアルパック・インターナショナルに、昨年まで勤務していた揚君に市内を案内してもらった。揚君は北京で日本の経済誌や白書などの翻訳をしているそうだが、「中国では今なかなか本が売れないのですよ。本屋も少ないですよ。」としきりに言っ

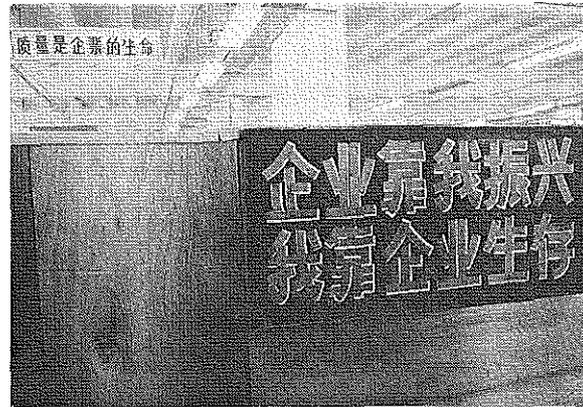
ていた。市場開放政策以来、中国は今、金本位制で動いており、学問よりとりあえずは金儲けに走っている人が多いようだ。考えてみるとひと昔前（昭和30年代）の日本においても各個人が本を多く購入するようなことはなく、60年代以降賃金の上昇と時間にゆとりが多少生まれたため、本を読むという行為が増えてきたのではないかと思う。したがって、中国でも当面は「本」より「とりあえずの飯の種」が必要であり、本屋が増えるには暫く時間がかかりそうだ。

〈黄河での観光開発論議〉

東営市では黄河下流域を案内していただき、これが日本に毎年降ってくる黄砂の元であることと、その雄大な川の流れに、驚きと親しみにも似た不思議な感慨にふけた。黄河下流域では黄河の堆積により毎年2,000haのデルタ地帯が自然発生的に造成されている。この広大な中国の陸地が年々増えているのは、驚きを通り越してただあきれるばかりである。

東営市では黄河を生かした観光開発の話が少し話題となった。東営市では黄河を観光資源として売り出すために、黄河の上流部から5km毎にそのポイントの黄河の水と砂を一升瓶程の大きさのケースに入れて、各地点毎の黄河と生態を観察してもらおうというような壮大な観光プロジェクトを模索しているとのことだった。5km毎といっても黄河は約5,460km程あるため、1,100箇所のポイントが必要であり、見て回るのにも時間とお金がかかりそうである。しかし投資の割には回収は難しいのではないかと思われるが、いかがなものであろうか。

視察団の中には、黄河は日本人にとって親しみのある河なので、黄河に大型クルーザーを浮かべ、その土地の中華料理を食べさせるなどの黄河クルージングは、日本人好みではないかとの意見も出された。



ヤマハ工場内のスローガン

また、中国の公衆トイレはドアがないため、日本人旅行者には不安な材料となっているので、東営市が率先して「モデルトイレ都市」となってはどうかといった意見も出された。これには私も同感であり、東営市のみならず主要都市にはこの考え方を導入してもらいたいものと思った。

〈天津・青島の工場団地開発と企業誘致〉

天津では中心部から約50km海岸部の埋立地に「天津経済技術開放区」がある。計画面積約33km²の工場団地で、すでに16km²が完成している。今までの投資契約50社、投資総額が約30億ドルに達しているとのことである。今年の10月には韓国企業専用の工場団地が完成するとのことであり、日本企業は少し出遅れているようだ。この経済区の中で「ヤマハの電子ピアノ工場」を見学させていただいた。ここではキットを日本から輸入し、主に低賃金の労働者を使った組立て主体の工場である。「経済区」全体の従業員の平均年齢が20代前半であることを考えると熟練労働者は少なく、ほとんどの企業が、低賃金の労働力と、これからの中国の市場を求めての進出であるよ

うだ。

一方、青島市では、市東部に位置し、計画対象面積が約59K㎡のハイテク工場団地を案内していただいた。ここは既存の住宅地を取り込んだ住宅開発、商業開発、リゾート開発、工場団地を組み合わせたものであり、建設面積は33K㎡、うち産業用地面積は15km²となっている。ヒアリングでは、西暦2000年までに完成するとのことであり、既に日本では日商岩井など12の企業が進出しているそうで、天津より日本企業の進出は活発のようである。

ここはハイテク工場団地というもの、研究所やハイテク企業にはこだわってなく、どちらかという複合都市型の工場団地といった方が適切なような気がする。いずれにしても今後、黄海・渤海沿岸での開発競争は、中国の開放政策とともにさらに激化しそうな勢いである。
(山田 龍雄)

「かんくう」へ行ってきました

9月4日に開港した「かんくう」こと関西国際空港を、オープンして最初の土日に見に行ってきました。9月10日(土)の福岡発関西国際空港行きは、土曜日の朝8:00発にも係わらず、満席の状態で出発しました。旅行会社の関空見学ツアーは、航空運賃とホテルがセットで格安に行けるということで、利用者が大変多いということです。私が参加した「ウォーターフロント研究会」の一团も、このツアーにのっかっていて、旅費・宿泊費で3万円程度でした。(普通は往復の航空運賃だけで26,100円)

(エレベータも透明)

ターミナルは4階建てで、大きく分けると1階が国

右：人々が行き交う国際線カウンター前

下：ターミナル内の渡り廊下



際線到着、2階が国内線の出発と到着、3階に物販・レストラン、4階が国際線出発になっています。

全階とも視界を遮る壁がなく(あってもガラス張り)、フロア全体が見渡せるようになっていて、今自分がどこにいるか、だいたいの位置はわかります。エレベーターの壁や天井、階段を囲む壁、渡り廊下の壁など全て透明で、そのため、壁に近づくと下から見える恐れがあるということで、ここで働く女性職員から働く環境としての不満も出たそうです。

(一番人が多いのはレストラン街)

私たちは、関空見学を飛行機の往復で空港を利用しましたが、オープン間もないため空港を見に来ている人が多く、どう見ても飛行機に乗るようには見えないサンダル履きの人や、遊園地に来るように小さな子供を連れた家族連れなども見受けられました。

ターミナルの中で一番人で混雑していたのはレストラン街で、どの店にも行列ができていて、ロビーのベンチでお弁当を食べている人もいました。

〈神戸、大阪から30分〉

空港から大阪方面に行く時には、南海電鉄の特急で、ダースペーダーに似た「ラピート号」に乗り、帰りは神戸からジェットフォイル「K-JET」を利用しました。どちらも30分程度で空港に行くことができ、今までの大阪空港に比べると、交通渋滞の心配がなく便利に感じました。料金は、前者がスーパーシートを利用して1,500円（ウーロン茶がタダで飲める）、後者が2,650円でした。

それでも、福岡の場合、天神から10分、220円で行ける空港は、格段に便利だと改めて感じました。

（歌丸 星子）

地味な遺産も立派な資源

～市内散策“やまだぶらぶら”～

〈人は減っても“宝”はある〉

全国で2番目に人口の少ない市、福岡県山田市で地元“宝”発見行事「やまだぶらぶら」が9月18日に行われた。山田市は一時筑豊炭田のおかげで栄え



横網不知火の墓

たが、現在は人口1万3千人と最盛期の3分の1に激減している。炭鉱に代わる新しい産業も育たず、また旧炭鉱のまちということで外の人々もあまりいいイメージを持たない。そこで今年度、この状況か

ら抜け出すきっかけを見つけるため、市民からの公募により「やまだイメージアップ委員会（仮称）」が約20名で結成された。月1回の委員会以外でののはじめての活動が、まずは己を知るための「やまだぶらぶら」である。

〈横網土俵入りも山田にルーツ〉

今回は史跡・文化遺産等、観光資源めぐりが中心であった。そのうちのいくつかをここで紹介したい。土俵入りの型にその名を残す横網不知火光五郎は山田市の出身。明治時代の横網である。不知火型土俵入りといえば、両手で攻めを表す豪快な型で知られる。最近では旭富士が不知火型だった。その横網不知火の墓が市内安国寺境内にある。

墓を見てまず驚くのは、あまりにきれいでピカピカなこと。前の墓碑の傷みがひどかったため、平成5年に新しくしたそう。新しすぎて歴史的な重みや有難みはいまひとつだが、横網の姿が刻まれた大きな石碑に並んで写真に収まるのはなかなか楽しそう。不知火関にちなんだ祭りか、相撲大会などのイベントがあってもいい。ちなみにもうひとつの雲龍型土俵入りの横網雲龍は同じ福岡県の大和町出身だそうで、福岡は相撲史にゆかりがあるようだが、ここの連携イベントも面白いかも知れない。

〈窯跡に朝鮮風の石像〉

高取焼といえば名の知れた焼物だが、このルーツとなる古高取山田窯跡がある。窯跡そのものは現存していないが、その場所には石碑がひっそり建っている。道路側から見えるのは「古高取窯跡碑」と刻まれた石碑だけ。しかしそこまで歩いていくと、朝鮮風の人物の石造が向かい合って並び、まんなかには亀の土台の上に石碑が乗り、その上に竜を彫った石が乗っている。竜の部分だけが古く、あとの部分

は割と新しい。この石碑は、高取焼をルーツに持つといわれる小石原焼窯元の人が、先祖供養のために十数年前建てたのだそうだ。

山田窯は、初代高取八蔵が故国朝鮮に帰ることを願ひ出たことが藩公の怒りに触れて山田に幽閉され、その数年間に使用された窯である。

窯跡に建つ朝鮮風の石碑と石像は、焼物の技術が朝鮮半島から来たことを改めて感じるとともに、高取八蔵の祖国への想いを良く表している。ある意味では、日本の文化の中に朝鮮から伝来したものが根を張って、今も生きていることを象徴的に見せられ、ドキリとしてしまうものでもある。

ふたつしか紹介できなかったが、他にも海洋性のはずが内陸に生育している珍しいバクチノキ、眺めのいいキャンプ場、最近完成した「手づくりふるさと村」など様々な所を見てまわった。全体に案内板等が少なく、知らない人は行きにくいという感じはしたが、これらをひとつの資源としてどうイメージアップを図っていくか、これからまちのひとたちと考えていきたい。(伊藤 聡)

食 場 日 誌

・ 9月×日

盲腸で緊急入院。以後3日間、点滴のみの絶食生活が続いた。好んで断食などをする人もいる一方で、不本意ながら動脈からの栄養補給に頼らざるを得ない人もこの世には大勢いるのだなあ、と少しばかり世の中のことを考え、健康な頃の暴飲暴食の生活をいたずらに懐かしんだ。(お)

・ 9月×日

盲腸がようやく取れて、昼食に重湯とコーンスープを頂いた。夕食は離乳食?のような人参と魚の刻み食。やっぱり食べ物って有り難いとしみじみと感じ入った。その夜、たこ焼きとカレーライスと焼き肉を食べているあまりにもリアルな夢を見たいそう苦しんだ。(お)

・ 9月×日

宮崎市上野町。JR九州発行の小冊子Please(9月号)紹介の店“にわさきたまご”で地鳥の炭火焼をいただいた。そのほくほくさと、塩加減の絶妙さといったらなかった。昼食ではやれ胡椒だ、やれタバスコだといって自分流に味付けし楽しんで食べていた所員達も、これには参ったとばかりに、うまいと言ったきり動かなくなってしまった。(な)

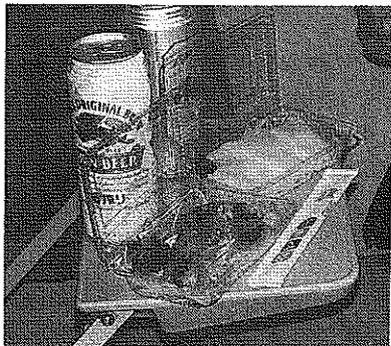
・ 9月×日

宮崎県東臼杵郡椎葉村。明日の朝はとうもろこし御飯ですよと民宿「焼畑」のクニ子お母さんが言ったので、密かにお腹の調子を整えて朝食を迎えた。興味津々で口に運ぶと、温かいういろいろの味がした。保温の状態で炊いてしまい申し訳ないと頭を下げてくださいましたが、うまれてはじめて食べたとうもろこし御飯は、それはそれで心に残る味となった。(な)

・ 9月×日

鹿島市の「道の駅」で、有明の海の幸をいただいた。ムツゴロウは、山椒を効かせた締まった味。望遠鏡を覗くと、ムツゴロウがびよんびよん濁の上を跳ねている。自然界の雄の求愛行動は本当に熱心だ。腹の中でムツゴロウがびよんびよん跳ねるような気がした。(お)

・ 9月×日



長崎市の仕事の帰りに、駅から歩いて10分くらいのところに位置している大黒市場の某魚屋さんの前を通りかかると、「いらっしゃい。箸と醤油を用意しているよ。」と声を掛けられた。これは『列車の中で食べて下さい』ということである。

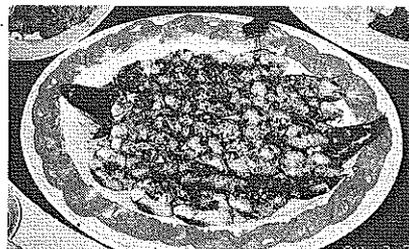
あまりの手回しの良さに驚くとともに、列車の中で刺身を食べるのもオツなものと思い、そこで「たこ」、「あじ」、「いか」の刺身、駅でビールを買い込み、急ぎ「かもめ」に乗り込んだ。

列車の中で食べる新鮮な刺身…また違った豊かさを感じてしまった。長崎から帰る折は一度お試し下さい。
(や)

食場日誌 ～中国編～

本誌の「食場日誌」では毎回、所員があちこちで食べたものについて報告していますが、今回は、少しばかり贅沢に、さる7/24～8/1に中国視察旅行に同行させて頂いた時に食べたものについて、「食場日誌・中国レポート」としてお伝えします。

(豊饒の渤海、黄河～東営)



80cmもある大きな鰻

黄河の河口部にある振興都市・東営では渤海、黄河産の魚介類を頂いた。中でも強烈な印象を受けたのは渤海産の鰻。太った80cmもあるのを筒切りにし、塩味で炒めたシンプルな料理だが、口に入れると、歯や唇がくっつきあうほど脂が濃厚だった。あんなに脂がのった鰻を口に入れたのは初めてだ。蒲焼きにすると燃えるだろう。

黄海の最奥部である渤海は、ノッペリとした広大な干潟が広がる内海で、平均水深8mの遠浅の海だ。栄養分が多い黄河が流れ込み、魚たちの格好の藻場になっている。ここで獲れる魚介類は北京や天津などの都市部に供給されるほか、甲殻類は日本にも輸出される。中国政府は、黄河河口デルタの開発を熱心に進めているが、渤海と黄河の海の生産性の高さにも着目しており、シンポジウムでも海洋の保全と開発の調整について検討された。

(「色場日誌？」お色気人形公園～青島)

国際的な避暑地・青島市で夕食に特産品の海老、蟹を頂いたあと、青島市の提灯祭りに連れていかれてもらった。いろんな張子の人形が提灯に照らされてきれいなのだが、男性陣の目を魅了していたのは、女性のヌードの張子。さすがに日本では当たり前になったヘアヌードではないが、色などが妙にリアルで

艶かしかった。開放政策は、一般市民の性の意識も解放したのだろうか。そういえば、若い女性の間ではミニスカートが流行っているようで、得意気に着こなして闊歩している女性の姿も多く見かけた。

なお、ヌード人形の所には、前にまわってじっくり見たい人のために有料の特別席が設置してあり、入場料は0.2元だった。私も0.2元払って特別席に入ってみた。人だかりがすごい。みんな写真をとっている。意外にカップルが多かったが、中にはじつりかぶりついて見ている中年男性もいた。

(町の食堂で羊のしゃぶしゃぶ～北京①)

北京では、北京在住の揚さんにしゃぶしゃぶ屋さん連れていってもらった。これが牛肉ならぬ羊肉のしゃぶしゃぶで、サーモンピンクの新鮮できれいな肉である。胡麻だれにつけて食べるといくらでもいける。田鰻もしゃぶしゃぶにして食べた。日本のツアーガイドでも、最近になって羊肉しゃぶしゃぶのことを紹介するようになってい

ふと、周りの中国の方々をみると、1人で何皿もたいらげている。中には3人前(1kg位)ほども食べて、なお、焼き餅をオーダーしている若くてキレイなお姉さんもいた。解放政策以来、中国では肥満型の体型の人が増えているそうだが、今回の旅行で出会った中国の方は大体がスリムだった。中国では労働は完全3交代制であり、これに則った規則正しい生活をしているためかもしれない。

(カップ麺はオシャレ?～北京②)

北京の百貨店の食料品売場では、日本のカップ麺とは違うものが並んでいた。肉味噌がのったジャージャー麺、広東風、四川風、日本風、インド風など色々な風味の拉麺などが揃えてある。その数ざっと30種。メーカーは香港の日系企業(日本の日清製粉

など)がほとんどだが、中には中国産もみられた。値段は1個4～8元。街角の拉麺が4～5元だから、カップ麺は贅沢品ともいえる。

私は10個ほど購入し、お土産にした。帰国後に食べた拉麺は、香辛料が少しきついピリ辛風だった。

なお、カップ麺は若い人に人気があるらしく、一種のお洒落のアイテムにもなっているようだ。数十個まとめて買う人もいるらしい。

中国も日本と同様、このまま、食のインスタント化が進むのだろうか。中国4000年の食の文化に新たな歴史が加わろうとしている。(尾崎 正利)

椎葉村の焼畑

— 農耕文化の原風景を見る —

〈日本唯一の焼畑〉

役場の方の車に分乗した我々は、砂利道の中を走り焼畑(ソバ畑)に辿り着いた。すでに標高1,000mを越えている。空気は澄んで冷たく、足元の斜面に広がる白いソバの花畑は清らかで美しかった。

椎葉村でこの焼畑農業を行っているのは、日本でたった一人の焼畑伝承者、椎葉秀行さんだった。

〈民族学発祥の地となった椎葉〉

焼畑農業そのものに加え、種蒔きや収穫時に歌われる作業歌も、日本古来の農耕文化を今にとどめる貴重な民族芸能として残っている。この文化的に重要な椎葉の生活・風俗を採集した柳田国男は「後狩詩記(のちかりことばのき)」を著し、この著作が「民族学」という新しい学問のきっかけとなったとされる。その日も文化人類学、民族学の先生が20人ほど来ていた。



一面のソバの花

〈30年以上放置して良好な土壌を待つ〉

「ソバは土が熱いうち撒いても大丈夫」「75日目刈り取れるので計算ができる」などの説明を、無口な秀行さんと、植物に関しては大学教授も子供といわれる奥さんが説明してくれた。焼畑地の周辺にも樹木は生い茂っており、燃え広がることはないのかとも思うが、木の切り方、燃やし方、火止めをつくることなどによって山火事にはならないそうだ。また、焼畑を行う場所は、広大な山間の土地の中から、その年の耕作に適したものを選ぶという。土は長く放っておけばおほくほど良いそうで、今回の土地（ソバ畑）は少なくとも30年以上は放置されたものという。なんとも気の長い話であるが、自然との共生によって得た先人の知恵とみることもできるだろう。

他にもヒエ、アワ畑を案内していただいた。いずれも山道険しい山間、斜面地にある。厳しい環境に適応した種を用い、自然に逆らうことなく農業を営んだ古人の生活に、日本文化の原点を感じた。焼畑は稲作より早く始まったといわれており、我々の見た光景は、農耕文化の原風景ともいえるだろう。

（北村 茂樹）

所内勉強会～道路とは～

講師：九州地方建設局技術管理課 森 弘光さん

9月2日に森さんを迎えて所内勉強会を行いました。「道路とは」について話をさせていただきました。

道路に関する様々な法律について道路管理、道路整備、有料道路、道路財源、その他の関係法令の流れ、この中で細かく法律が組み込まれていたり、さらに道路というだけでもいくつもの様々な法律があるという説明を聞き、複雑なのだなあと思いました。

次は道路事業の仕組みについて、石油ガス税や自動車重量税、NTT財源、自動車取得税等の財源から道路をつくっていくこと、負担率、補助率等についての説明を受け、普段あまりそのようなことについて考えたことがなかったので大変勉強になりました。

さらに、内容は身近な話へと進み、やまなみハイウェイの無料化についての話や、交通量調査のやり方、福岡市と北九州市を例に挙げた都市計画道路の整備率の話、長崎自動車道の金立サービスエリアが「道の駅」のコンセプト発祥地である、また道路計画上の悩み（失敗談も含め）等について、道路計画のプロの話を聞いて、ただ単に道路ではなく、その道路の奥深さ（人間にとって道路とは何か）を考える機会を持って、今後の仕事に大いに役立つと思いました。

この勉強会で使われた「1993道路ポケットブック」は、道路に関しての様々なデータが詰まっています。非常にコンパクトにまとめられた本です。道路に興味を持っている人は、大変重宝していると思います。

最後になりましたがこの場をかりてお礼申し上げます。
（宮原 真一）



自由時間新時代

生活小国からの脱出法

津端 修一 著
はる書房



現代ヨーロッパ 農村休暇事情

続・生活小国からの脱出法

津端 修一 著
はる書房

「自由時間新時代」は、高齢化社会を豊かに生きるための具体的提案をクラインガルテン（家庭農園）、家族バカンスを中心に報告されたものである。

「現代ヨーロッパ農村休暇事情」では、著者の現地踏査によるヨーロッパにおけるアグリツーリズム（農村休暇）の具体的な検証を通じて、その背景にある思想や行動をまとめ、ひいてはいかに老後を充実して生きていくかということを示唆している。

著者の実体験を通して書かれる内容は、高齢化、休暇制度の変化といったこれからの社会に対する重要な提言であり非常に興味深い。

そこで、両著書のなかで印象に残ったことを紹介する。

（お父さんは透明人間）

日本は国民休暇法もなく、自由時間教育も育ってはいない。どこかで「休暇＝怠ける」といった考えがのこっており、家族で行動する機会も少ないのが現実で、父親と接することの少ない子供が「おとうさんは、透明人間…」といった詩をかくなど、日本の子供達の世界から「父親」が消えてしまっている。

ヨーロッパの子ども達は、小さい頃から学校で休暇の過ごし方や、休暇・バカンスがいかに生活を豊かにしてくれるかを教えられ、長いバカンスを家族と共に過ごすことで、その大切さを実感して大きくなっていく。

（農村休暇を支えるランドレディ）

オーストリアの国際ツーリズムの収入は、この10年間で1兆円から2兆円に倍増した。この国のGNPの20%は国際ツーリズムによるものであり、その中でも農村休暇の比重は大きく、国際ツーリズムといえば「アグリツーリズム（農村休暇）」を意味している。

農村休暇施設は、古い農家ストックを改造して行われることが多い。これに対し、様々な規制（経営は家族単位で行う、主人には窃盗などの前科がないなど）があるものの、行政がこれを支援している。

農村休暇の主役であるランドレディ（女主人）は、外国人相手のホスピタリティーをごく自然に身につけ、知性を持っている。

農業経営が大変だから、新しい兼業として「アグリツーリズム（農村休暇）」が登場したことも確かだ

が、農村の保持、都市と農村の共栄、また農村部に住む人々の社会性、国際性を育むといった面からも大きな意義があると思う。

(生活にこだわりを持って生きる)

これから確実にやってくる高齢化社会、それに伴う、若者の高負担、「老後」を迎えることとなる中年層、それぞれに不安を抱え、その展望は決してバラ色とはいかないようである。

高負担高福祉には限界がある。福祉のレベルを維持して行くには、長くなった余生を本人達がいかにか自立し、生活の質をどう高めるかが大切である。

年金だけに頼らないために、自立のための生活・生産施設が必要である。

ドイツでは、市民が家とクラインガルテン(家庭農園)を持つ権利が守られている。日本の家庭菜園とは質的に異なり、たとえ、生活に困ったとしても自分が口にするものは自分で作ることができる。

そういった、生活にこだわりを持って生きることが、これからの高齢化社会において、シニアがまとめ買いさせられた自由時間を質的に高いものとする手段である。(金川 薫)

編集後記

■今号は佐賀にはじまり、宮崎県椎葉、中国東営市など九州ならではの情報をお送りいたしました。特にシンクタンク協議会でも話題になりましたが、地域資源を活かした競争の時代を迎えて、「よか情報」を今後とも発信したいと思えます。

■秘境椎葉村はその名の通り延々と山道を登って

いった先にあります。さらに村の中心から1時間以上、民宿「焼畑」は山あいの谷の少しせり出したところにひっそりと立っています。椎葉さん夫妻の暖かいもてなしは、日々時間に追われる我々の暮らしを忘れさせてくれました。

■前号より読者の皆様をお願いしている返信葉書を今回も引き続き同封していますのでよろしくお願ひします。

■返信葉書で多くの方から励ましや感謝をはじめ、辛口の御批判などをいただき所員一同感謝しています。ネットワークの中で一部掲載させていただいた方以外にも多くの方から返事をいただき、この場を借りて感謝申し上げます。

■相変わらず福岡は給水制限(朝10時~夜10時給水)が続いています。多分お手元に届く頃もまだ続いているでしょう。秋晴れの天気が恨めしくもあります。(辺)

よかネット NO.12 1994.11

(編集・発行)

㈱九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-1 日之出ビル6F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)

アルバック㈱地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-942-5732

名古屋事務所 TEL 052-962-1224

東京事務所 TEL 03-3226-9130